

福岡大学 医学会ニュース

No. 59

福岡大学医学会 福岡大学医学部内

臨床一筋25年間 感謝



名誉教授 前外科学第一教授

池田 靖洋

一九八四年四月以来、年制への変革が行われ、二十二年間、主任教授（六十五歳以上の主任教授は、毎年、段階的に退任する）として、私は、九九年十月より、福岡大学医学部第一外科に勤務することになり、私は、六十七歳となった年度末の三月末日で退任いたしました。その時点で、大主任教授の定年は七十歳でしたが、六十五歳定学を去るか、七十歳まで報告する責務を感じてい

来し方、そして現在



名誉教授 前呼吸器・乳腺内分泌・小児外科学教授

白日 高歩

福岡大学には昭和五十二年より平成二十一年三月迄、大変長い期間に渡って勤務（旧福岡大学二外科）させていただき、託された一つの課題として、この間、平成二年より三年半程、産業医、外科（一外科、二外科）の統合再編という仕

たので、後者を選択させていただき、この二十五年間も好きな臨床に従事させていただき、幸せな良き時代を過ごせたことを感謝いたしております。そして、この度、無事退任することができましたのも、偏に皆様のご支援の賜で、これまで関わって下さった多くの方々に、改めて、心から御礼申し上げます。

二〇〇六年十月、医学部講座の臓器再編に伴って、外科学第一、第二というナンバー外科の名称が消え、消化器部門は両外科が合併し、消化器外科教室が誕生しました。一抹の寂しさは、禁じ得ませんが、患者さんに理

があり、極端な言い方をすれば、いわばコロニ的存在の一外科、二外科でありました。このような体制が新設大学にとつて不利益な事は明らかであり、日本の各地で外科部門の統合再編が進んでゆきましたが、福岡においては平成十八年になってようやく関係者の方々の協力を得てこの統合再編が成就しました。この意義につき時代の当然の流れと考える事も可能ですが、新しい組織を生かすも殺すもそれを構成する次世代の人達の意思と努力にかかっていると考えます。

どうかさらにこの改革をよき方向に推し進めていただく事を強く期待して



福岡大学医学会
第六十回例会および
第三十二回総会(報告)

日時 平成二十二年十月二十三日(金)
十七時~十九時十五分

場所 医学部臨床大講堂

- 一、第六十回福岡大学医学会例会
- 【進行】集会幹事 岩本 隆宏
- 一、開会の辞 集会幹事 岩本 隆宏
- 二、会長挨拶 医学部長 黒木 政秀
- 三、第十一回福岡大学医学会賞受賞論文講演
- 講演一 講演者：今泉 聡 座長：朔啓二郎
(代理上原吉就) (代理出石宗仁)
- 講演二 講演者：安野 哲彦 座長：齊藤 喬雄
- 講演三 講演者：四元 房典 座長：黒木 政秀
- 四、第十一回福岡大学医学会賞金賞論文投票
- 五、新任教授講演 座長：黒木 政秀
- 講演一 講演者：井上 亨
(脳神経外科学教授)
- 「脳卒中の外科治療の最先端」
- 講演二 講演者：柳瀬 敏彦
(内分泌・糖尿病内科学教授)
- 「ホルモンと生活習慣病」
- 二、第三十二回福岡大学医学会総会
- 【進行】庶務幹事 井上 隆司
- 一、議事
- ① 報告事項
- ② 平成二十一年度会計報告および平成二十一年度予算案
- 二、第十一回福岡大学医学会賞授賞式
- 【進行】集会幹事 岩本 隆宏
- ① 開票結果発表
- ② 授賞式
- 三、閉会の辞 集会幹事 岩本 隆宏
- *第十一回福岡大学医学会賞の開票結果、
論文名および受賞者写真は六面に記載

新 風

平成21年4月1日付けで本学へ赴任、または昇格された方に自己紹介をしていただきました。

内分泌・糖尿病内科科学教授

柳瀬 敏彦



本年四月一日付けをもつて医学部新設講座の内分泌・糖尿病学講座の教授として赴任いたしました。福岡大学の明るい雰囲気はもちろんですが、仕事場から油山と福岡ドームが一緒に眺望できるロケーションも大変、気に入って楽しく仕事をさせていただいています。昭和五十五年、九大卒業後、九大病院、飯塚病院での二年間の臨床研修を行いました。忙しくも楽しかった研修医時代が、い最近のようでもあり、その時の臨床経験が内科医師としての自分の原点となっています。その後、北九州医療センター糖尿病センター勤務、九大医員時代を経て、米國テキサス大学(ダラス校)に

産科婦人科学教授

宮本 新吾



平成二十一年四月より福岡大学医学部産婦人科講座の主任教授に就任しました宮本新吾です。昭和五十八年に九州大学医学部を卒業後に、臨床研修を行い、昭和六十一年より一年数か月の期間、研究生として臨床研究を開始しました。昭和六十二年より七年間、九州大学生体防御医学研究所附属病院で助教として診療と研究に従事し、その内三年半は医局長として勤務していました。その後、三年四か月の米國国立保健衛生研究所(NIH)の留学を終了して、婦人科悪性腫瘍について診療と研究を再開しました。平成十七年より九州大学医学部産婦人科より着任し、二年間の当大学産婦人科での勤務の後に福岡大学医学部生化学に勤務を変えて卵巣がん治療薬の開発を行ってまいりました。私が携わってきたアカデミア発のがん標的治療薬の開発は、上皮系増殖因子を標的とした世界で初めての治療薬であることや医師主導型治療は本邦で初めてであることから、福岡大学でも高い評価を受けてまいりました。アカデミアとは、どうあるべきかを常に意識して、研究心を持ち続ける教室づくりを行いたいと考えています。

福岡大学医学部産婦人科講座での診療は、母体・胎児治療を行う周産期領域、悪性腫瘍治療を中心とした婦人科領域、更年期・不妊を中心とした内分泌領域から構成されています。まず、当教室は福岡県総合周産期センターとしての指定を受け、今後は北部九州領域の周産期医療を当院小児科・小児外科とともに担わなければならないと考え、このような社会背景から、母体・胎児治療を行う周産期領域における抱負は、病院内外に当教室員の診療努力を十分に訴えていく必要があるとともに、行政や病院からの人的・資金的助成を仰いで他の総合周産期センターや地域周産期センター、最終的には開業されている医院までをIT化してネットワークで結び「安心・安全」の診療体制の確立を目指していくことです。平成二十一年一月より、体制づくりの準備を開始し、目標達成への大きな一歩を踏み出すことができています。一方、婦人科領域では、現在実施中の「新たな卵巣がん治療薬の開発」を終了させ、第二相臨床試験(治験)を開始することを目指しています。したがって、婦人科領域における抱負は、EBM(Evidence Based Medicine)に基づいた診療を行うことはもとより、我々自らEBMを作成して世界に発信していくことです。さらに、内分泌領域における抱負は、骨粗鬆症・子宮内膜症への内科的な保存治療あるいは腹腔鏡を用いた非侵襲

的手術治療を多くの教室員が経験できる体制をつくることです。

趣味と言えるものはなく、現在一番気になっていることは「体重」でジムに通うくらいが楽しみです。どうぞ、今後とも末永くよろしく願います。

看護学科学教授

原田 広枝



「自分がおもしろい、楽しいと思ったことをやればいんだよ」。私が、三十三年間勤務した厚生年金事業振興団傘下の看護専門学校にとどまるべきか、それとも招聘された九州大学で看護教育に携わるべきか相談した際の菊池裕院長の言葉である。思えば私はいつも自分の興味関心に沿って生きてきた。看護師になってからは看護の対象である人間の生命力やユニークさにふれ、看護師ほどおもしろい職業はない、ずっと看護職を続けたいと思った。九州厚生年金看護専門学校の教員に異動してからは人を育てる仕事、その人らしく生きるための学びの支援ほど素晴らしい仕事はないと考えた。四十代後半から進んだ福岡教育大学大学院修士課程では教育方法学を、九州大学大学院後期博士課程では教育経営学を専攻した。厳しいが温かい恩師の指導のもと、国内外の最新の知識や理

論にふれ刺激の多い充実した時間であった。また、将来教育者として学会を背負うような大学院生や様々な国からの留学生と切磋琢磨しながら学び、学びには学習共同体が不可欠であることを認識した。研究者として新しい知見を生み出す困難を体験したが、長い苦しみの中で、長い光が見えた。後には、望外の喜びであった。この時期は、仕事・家事・子育て・親の介護をしながら夜間に学習してきたが、仕事や家庭と異なる場を持つことが、ある意味ストレス対処になったし、自信がなくなっても取り組むことで新たな世界が広がることを実感した。九州大学医学部保健学科では個性的でパワフルな教員集団に圧倒されたが学問の世界の広さ、看護学の深さを体感した時間であった。振り返って気づいたことは、楽しみは自分で創るものであり、人の出会い・めぐり合いがそれを生み出すこと、困難や葛藤に取り組むことは自己のペースペクティブに変容をもたらす成長につながることであった。福岡大学では諸先生方のご指導を頂き、看護職者育成に微力ながら貢献していきたいと思っております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

薬理学准教授

山本 信太郎



本年四月より福岡大学医学部薬理学教室に赴任いたしました。宮崎県出身で、平成六年に佐賀医科大学(当時)を卒業後、同小児科研修医を経て、平成九年に同大学院(生理学)に進学しました。心筋細胞の容積調節機構やイオンチャネルの研究で学位を取得した後、平成十三年四月から平成二十一年三月までは同教室助手として在籍し、その間、平成十三年から二年間は米國ネバダ州立大学薬理学へ長期出張させていただきました。近年では、急速単離したマウス心筋細胞にパッチクランプ法を用いたイオンチャネルの電気生理学的な解析をテーマとして研究を続けてきましたが、色々な分野の先生方と研究を深めたいと考えていましたところ、偶然に福岡大学医学部薬理学の岩本隆宏教授と出会う機会に恵まれ、佐賀大学での恩師の先生の退官を機に、福岡大学医学部薬理学に勤務させていただくこととなりました。

これまでの自分を振り返ってみると、節目で良い先生との出会いのおかげで今の自分があると思っています。中学時代には、情熱的に数学の面白さを伝える先生と出会いました。高校時代には、医学部への進学を後押ししてくれた先生と出会いました。大学時代には、正しいものの見方考え方を学ぶのが大切であることを教えてくれた先生と出会いました。研修医時代には、責任と信頼について示してくれた先生に出会いました。大学院時代には、生命現象のおもしろさを教えてくれた先生に出会いました。当教室はイオン膜輸送機構の解明、創薬・疾患モデルの開発、新規診断法・治療薬の開発などを主な目的とし、平均年齢がまだ三十歳代という若いメンバーで構成されています。このメンバーとともに、研究のみならず、教育の面にも新しい試みを開始し、生命現象の「おもしろさ」や「不思議さ」を「感動」を少しでも学生に伝えることができたいと思っています。これからますますよろしくお願い申し上げます。

再生・移植医学准教授

小玉 正太



平成二年福岡大学医学部を卒業し、旧第一外科(現消化器外科)に入局しました。心臓血管外科、放射線科、麻酔科、救命センターをローテーション後、市中病院で外科勤務を経て、愛知県がんセンターでチーフ・レジデントとしてがん専門病院に二年間勤務しています。その後、福岡大学に進学し、現講座の安波教授に学位

を御指導頂きました。大学院卒業後は平成十二年より、米國 Harvard Medical School の施設にある、Massachusetts General Hospital(MGH)の Faustman 博士にご指導頂き、免疫生物学教室で博士研究員として留学しています。その後、Harvard 大学講師を経て五年間 MGH に勤務しました。この間、肝臓再生機構や自己免疫応答に関する発表を行い、平成十七年より組織工学・再生医学講座の Vacanti 博士から招聘頂き、同じ Harvard Medical School 内の施設である、Brigham and Women's Hospital に助教として移籍し、四年間勤務しています。米國生活が長くなりましたが、この度指導教官でありました、安波教授からお誘い頂きまして、本年度四月から再生・移植医学講座に着任いたします。帰国後は医学部の教育制度改正など、ほぼ浦島太郎状態ではありましたが、早急に適合する様に努力しています。今後は米國で培いました経験を基に、母校の発展のため微力を尽くさせて頂こうと考えています。再生医学をはじめとする、新しい学問分野では、旧縦断型型の研究・臨床体系である、今後対応の難しい分野も増えて行くものと思われまます。臨床・基礎・再生医学分野など、研究室本来の基盤研究に加え、再生医学分野では横型で他科との関連や、共同研究を広げて行きたいと考えています。



皮膚科学准教授
今福 信一



本年四月より准教授に昇格させていただきました。実は昨年このニュースで挨拶をさせていただきましたので恐縮ですが、私は長崎市の生まれで当時は無名であつた青雲中学・高校と青春の六年間を男子校で過ごしてまいりました。平成三年に九州大学を卒業し、同大皮膚科に入局、米国メリーランド大学ウイルス免疫学教室を経て、広島赤十字・原爆病院、北九州市立医療センターなどの基幹病院と九州大学病院を行ったり来たりしてまいりましたが、平成十九年四月からいろいろ縁あつてかつて九大の医局でお世話になった中山樹一郎教授のもとで仕事をさせていただくことになりました。専門はヘルペスウイルス感染症、C型肝炎などの内科疾患に伴う皮膚症状、尋常性乾癬を中心に診療していますが、皮膚科全般何でも診ています。内科疾患などの患者さんでも気になる皮膚症状がありまして、気軽に診せて下さい。皮膚科十九年目にし

に對して原因を考え、いろいろなアイデアで治療に工夫を凝らすことを忘れずにいたいと思います。二年前から褥瘡対策委員を務めておりましたが、今年度から「褥瘡対策室長」を拝命しました。約二年間の回診の記録を集計してみると、回診をした患者の1/4は院内で亡くなつていました。しかし死亡の転帰を取った患者も初診時と最終診察時の褥瘡の重症度に大きな差がないことも解りました。死に至る場合もかつてのような褥瘡の悪化は見られなくなつたのは病棟スタッフの努力を含めた対策の成果だと思われま

す。褥瘡の診療では主治医の原疾患治療方針が重要になります。治癒の望めない患者の褥瘡治療にどの程度のリスクをとるか、院内でのコンセンサス作りをしたいと考えています。消化器外科准教授 乗富 智明



このたび、福岡大学病院消化器外科准教授を拝命いたしました乗富智明です。私は、平成元年に久留米大学医学部を卒業し当時の久留米大学第一外科に入局いたしました。二年間の学内研修の後、福岡県立柳川病院(当時)、福岡県立朝倉病院(当時)、福岡県立久留米第一病院、社会保険久留米第一病院と勤務し外科の基本を学んだのち平成六年より二

年半の米国留学に出ました。留学では医用超音波の基礎的研究に関する仕事に従事しそこの仕事の一つ、「In Vivo Detection of Carotid Plaque Thrombus by Ultrasonic Tissue Characterization」という論文で後に久留米大学から論文博士をいただきました。帰国後、医学部ではなく医療についての考察が深まりました。そして平成九年夏、久留米大学にもどり肝・胆・脾外科の修行を開始しました。平成十一年秋より北海道大学第一外科に国内留学。葛西外科の伝統を引き継ぐ北大一外では、世界一の名手である藤堂教授の手術に感動し、九州では未だ見ないエキノコカスの巨大病変に恐怖し、週四例のメジャール切除術と早期からのカンファレンスでふらふらになり大変勉強になりました。また、個人的にも地方の乳癌検診で吹雪のなか遭難しかかったり、消化管出血で出血性ショックになったりと盛り沢山の北海道生活でした。平成十三年に北大を辞めたあと久留米を退局し朝倉市の朝倉健生病院で少



この一年間、多剤耐性アシネトバクターやVREによる施設内感染の集積、職員の結核発症など、感染対策の上で数々の困難な事例がありました。これに伴い「感染対策室」は「感染制御部」へと改組され、兼任スタッフから構成されていたボランテア組織から、感染制御を主業務とする専従・専任スタッフを配属した病院の一部門として独立し、四月から部長職(准教授)を拝命致しました。

一九八七年に岡山大学を卒業後、九州大学医学部第一内科(現 病態修復内科)へ入局。九州大学附属病院等で臨床研修後、九州大学大学院細菌学教室で研究に従事し、病原微生物との関わりがはじまりました。一九九一年〜二〇〇二年バンダイビルト大学、ニューヨーク大学で米国感染症学会の重鎮であるブレイザ教授の下、消化管病原微生物の研究に従事すると共に、米国感染症医の活動を見聞し、現在の診療の礎となつています。二〇〇二年に帰国後、田村和夫教授のご厚意で現腫瘍・血液・感染症内科で感染症の診療に従事し、今日に至っています。一九九四年から五年間の臨床検査医学での在籍期間を合わせると、医師としてのキャリアの半分以上を福岡大学で過ごしてきました。

感染制御部の業務は、I)施設内感染の予防、対策、II)抗菌薬の適正使用を含む感染症診療の支援・介入、の二本柱からなります。業務内容が多岐にわたるため、インフェクションコントロールドクター並びにナース、薬剤師、臨床検査部、事務部門など複数の関連職種からなる構成員との密接な連携の下に、組織横断的な院内活動を行っています。

研究面では、日和見感染症を軸に、臨床微生物学的視点をベースとした解析を行っています。平成二十年秋には復旦大学附属上海市公共衛生センターの客員教授を拝命し、今後は海外施設との交流も活性化できればと考えています。Think global, Act locallyをモットーに、広い視野を保ちつつ地に足のついた仕事を積み重ねていく所存です。皆様の一層のご理解とご支援の程、よろしくお願ひ申し上げます。

筑紫病院脳神経外科准教授
相川 博



この度、風川清教授のご推荐により福岡大学筑紫病院脳神経外科准教授を拝命いたしました。生来の粗忽者ですが何卒よろしくお願ひ申し上げます。専門は先に述べましたように脳血管障害に対する血管内治療で、これまで日本脳神経外科学会専門医、日本脳神経血管内治療学会専門医、日本脳卒中学会専門医を取得いたしております。本年四月には准教授を拝命し、これまでに大局的な視野に立つて地域の医療やスタッフの教育に貢献する責務を負う立場となりました。より先進的、かつ血の通った診療を地域に二十四時間提供する

こと、またそのためにスタッフを効果的に教育し診療体制を構築・維持することが私に課せられた責任であると思っております。浅学にてこの責務が果たせるかはなほ心許ない思いがいたしますが、榮えある福岡大学医学会の諸先生方には何卒旧来の倍するご指導とご鞭撻を賜り、福岡大学筑紫病院脳神経外科の進むべき路をお示し頂きますようお願い申し上げます。

平成七年七月に自衛隊を退職後は朝長教授のお計らいで福岡赤十字病院、その後平成九年十月には福岡大学脳神経外科に助手として奉職いたしました。平成十年四月、大学の先輩で、国立循環器病

筑紫病院耳鼻咽喉科准教授
坂田 俊文



センター等にて脳血管内手術を専攻された風川先生が同医局に赴任され再会を果たすことができました。以後先生に私淑し、この先端治療の技術習得と開発が生涯のテーマとなりました。平成十二年十月、長崎北徳洲会病院に勤務の後、平成十四年四月から現在の福岡大学筑紫病院脳神経外科にて勤務を続けています。

専門は先に述べましたように脳血管障害に対する血管内治療で、これまで日本脳神経外科学会専門医、日本脳神経血管内治療学会専門医、日本脳卒中学会専門医を取得いたしております。本年四月には准教授を拝命し、これまでに大局的な視野に立つて地域の医療やスタッフの教育に貢献する責務を負う立場となりました。より先進的、かつ血の通った診療を地域に二十四時間提供する

こと、またそのためにスタッフを効果的に教育し診療体制を構築・維持することが私に課せられた責任であると思っております。浅学にてこの責務が果たせるかはなほ心許ない思いがいたしますが、榮えある福岡大学医学会の諸先生方には何卒旧来の倍するご指導とご鞭撻を賜り、福岡大学筑紫病院脳神経外科の進むべき路をお示し頂きますようお願い申し上げます。



看護学科准教授

塚原 ひとみ



本年四月より、医学部看護学科の母性看護学の担当として着任いたしました。私は、遡ること三十数年前、福岡大学病院へ助産師として入職いたしました。昭和五十年代は、出生率も高く、福岡大学病院の分娩取扱数は約七〇〇例であり、就職時の一年間で八十例の分娩介助を経験いたしました。当時を振り返りますと、現在言われている、院内助産に近い状況で、分娩経過の逸脱がなければ医師の診察も少なく、助産師としての責任と判断力を十分に養うことができました。産科病棟や外来での継続看護、病棟管理を経験した後、一九九〇年に福岡大学附属看護専門学校へ看護教員として異動いたしました。母性看護学・基礎看護学の授業や学年担任などの経験から、看護基礎教育を体系的に理解し、教えること・学ぶことの奥深さを実感いたしました。

一九九六年には臨床に戻り、看護職員の人材育成・人事管理の企画・実践を行いました。福岡大学病院における看護の質保証と質向上を目標に、成人学習者の経験と主体性の尊重、長期展望に立った人材育成のあり様を考える機会となりました。そして、二〇〇七年に、再度、福岡大学附属看護

専門学校に戻り、閉校までの二年間、貴重な経験をいたしました。看護基礎教育と臨床現場との乖離から、リアリティーシヨックや新人看護職員の離職が問題視されていま

すが、看護専門学校では、これまでの継続教育の経験を生かし、卒業時に臨床への移行教育を試みしました。以上のように、私の経験は、臨床における継続教育と看護管理が最も長くなりました。

三十四年の歴史を持つ看護専門学校の閉校は寂しくもありますが、福岡大学における看護の学士課程教育に携わることが大きな喜びです。言うまでもなく、看護は実践の学問であり、臨床実習における看護の学びは学生にとって不可欠な学習です。これまでの経験を生かし、大学教育と臨床看護現場との橋渡し役となるよう努力してまいりたいと思います。

でもなく、看護は実践の学問であり、臨床実習における看護の学びは学生にとって不可欠な学習です。これまでの経験を生かし、大学教育と臨床看護現場との橋渡し役となるよう努力してまいりたいと思います。

精神医学講師

松下 満彦



平成二十一年四月から福岡大学医学部精神医学教室の講師に昇格させて頂きました。私は、平成九年川崎医科大学を卒業しましたが、一年ほど自由の身となり、その後、同病院にて二年間研修し、平成十二年四月から当教室に所属してちょうど十年目になります。この間、西村教授には福岡大学大

いと考えています。そのほか、症状緩和チームの一員として「不安」「抑うつ」「せん妄状態」「精神運動興奮」などの精神症状の緩和を担当しています。疾患・症状の治療を追求する一般医療に対して、精神医学では、痛みや不安など喪失を含む問題について、同様に完全治癒を目標とする一方、その人なりの折り合いを模索していく点が難しいところといえます。

このような問題に対して、臨床および研究はもとより、学生時代の自分の経験も生かし、微力ながら本大学の力になれたいと思います。今後ともよろしくお願い致します。

消化器外科講師

篠原 徹雄



私は、長崎市出身で、長崎北校を卒業後、福岡大学に入学し、一九八九年に同大学を卒業しました。学生時代は、軟式庭球愛好会(現ソフトテニス愛好会)でテニスに明け暮れ黒くなっていました。卒業後は、福岡大学(旧)第二外科に入学し、福岡大学病院をはじめ、筑豊病院、飯塚病院、九州がんセンターなどで麻酔や外科の研修をさせて頂きました。一九九二年より福岡大学(旧)第一病理学教室にお世話になり、消化管病理を勉強させて頂き、TUNEL法を用いて「Apoptosis and

消化器内科講師

岩田 都



一九九〇年に福岡大学医学部を卒業後、当時の福岡大学医学部第一内科(奥村内科)に入局しました。一九八九年、肝炎で問題になっていたC型肝炎ウイルスが発見され、一九九一年には実際の臨床でC型肝炎ウイルスの抗体検査が可能になりました。その結果、当時、非A非B型と言われていた肝障害の原因のほとんどがC型肝炎であったことが分かり、多くのC型肝炎の患者さんを診る事となりました。また、C型肝炎に対するインターフェロン療法も始まり、病棟にはC型肝炎の患者さんが次々と入院してき

ました。このような時期であったことと、主任教授である奥村教授の専門が肝臓病学であったこともあり、研修医が関わった後に肝臓病学を専攻しました。一九九六年には福岡赤十字病院に勤務し、志す若い医師を育てることが急務です。そこで学生や研修医の先生方に消化器外科の魅力を伝えていきたいと思っています。最後に、ほんの少しの息抜きに、磯釣りに行ったり、モータースポーツを見たり参加したり、ミニカーを眺めたりする時間も作りたいと思います。今後ともご指導、御鞭撻をよろしくお願い致します。

灼術という新しい治療法があり、今後治療の主流となると考えられるので、福岡大学でも早期に導入する様に」と言われ、苦労の末、二〇〇〇年八月より福岡大学病院でラジオ波焼灼術を開始しました。そして現在では、国内でも多くの肝臓に対するラジオ波焼灼術を行っている施設の一つになる事ができました。今後は肝臓の治療を主なライフワークにして微力ではありますが、福岡大学の発展に貢献したいと思っております。よろしく願ひいたします。

総合周産期母子医療センター講師

増本 幸二



平成二十一年四月より、当大学病院総合周産期母子医療センターに外科担当の講師として赴任いたしました。増本幸二と申します。佐賀県唐津市の出身で、平成三年に九州大学医学部を卒業しました。その後、小児外科を専攻し、九州大学病院、福岡市立こども病院、国立福岡中央病院、大分県立病院、北九州市立医療センターで研鑽を積み参りました。私の専門分野は主に新生児外科と外科栄養です。先天性腸閉鎖症および先天性横隔膜ヘルニアの研究を行っていました。特に坂教授より「ラジオ波焼

筑紫病院外科講師

酒井 憲見



一九八五年、福岡大学医学部を卒業し、福岡大学第二外科(旧)へ入局しました。入局後は福岡大学病院第二外科、福岡大学筑紫病院外科、北九州市立小倉病院麻酔科(北九州医療センター)、国立大分病院外科で研修しました。一九八七年より、実家で開業していましたが、一九九〇年、福岡大学第二外科へ復帰し、犬塚貞光教授、神代龍之介助教授のご指導により、一九九二年「直腸癌に対する微粒子活性炭CH40を指標とした神経温存リンパ節廓清術に関する研究」で学位を習得させて頂きました。同年、神代助教授の紹介で米国のHahnemann大学のKraner Center for IBD Researchへ留学し、炎症性腸疾患や虚血再灌流にお



ける活性酸素やサイトカインの研究をさせて頂きました。一九九三年、福岡大学へ戻ってからは、脳神経内科病棟(六階北病棟)に五年、腎センタ

に二年勤務しました。なかでも、最初に配属された脳・神経内科病棟での経験は、今でも私の専門職としての責任を追求する姿勢とモチベーションを継続させる糧とな

っています。原因不明の難病と闘う患者の姿、また病気の進行に大きな不安を抱えながら、一寸の可能性に祈りを捧げる家族の姿、

惜しみない努力を捧げる医療職の姿は、今でも忘れられる事が出来ません。難病などで治療の方向性が見出せず、退院する旨を告げられた患者および家族の悲嘆は、想像を超えてはるかに大きいもので

す。その光景を見るたびに、退院後の患者や家族の様子に気がなつて仕方ありませんでした。しだいに在宅での療養生活をサポートしたいという思いが強く、七年勤めた病棟を退職することにしました。

退職後は、地域医療や在宅ケアに携わるために、大学および大学院で学業に専念しながら介護支援専門員として働きました。在宅で療養している人々は、病院と違う様々な顔を私に見せてくれます。

例えば、親としての威厳のある顔、ボランティア協会の顔、近所づきあいの顔など。その経験から、「生きること」「健康であること」とは、自己の役割を持てる環境の中

でこそ見出せるものではないかと考えさせられ、改めて生活環境の重要性を実感しました。

今後、療養生活者が自ら、身の丈にあった人生のパズルを完成させることができるように、緩やかに共存できるサポートを目標として、地域医療や在宅ケアに携わっていきたいと思います。

開学三年目を迎えた看護学科は、新設のため学習環境がとて充実している、非常に恵まれている職場です。また教育熱心で責任感の強い先生方が多く、共に働けることを大変有り難く思います。

まずは看護学生に地域医療や在宅ケアに興味関心をもってもらうため、在宅看護教育に精進して参ります。何卒、ご指導を賜りますよう、お願い申し上げます。

.....

本年四月より、医学部看護学科の「教職担当」として着任いたしました。本学科で看護教諭または高等学校看護科教諭の資格を取得するための科目等を主に担当させていた

だします。私は、公立学校の養護教諭として十五年間、高等学校教諭として五年間の教育現場経験後、中村学園大学短期大学部講師として七年間の勤務を経て、本学に参りました。

近年、妊婦の栄養状態が胎児および新生児に影響を及ぼし、児の一生の健康に与える報告もあ

ります。私も妊婦や新生児の「食の援助」に関心をもち、助産師が実施している看護のエビデンスを探究しようと、胎盤の物質の通過機構や、出生直後の授乳形態が小腸の吸収機構に及ぼす影響など、動物モデルを用いた「食」に関する組織形態

学的な研究を行い、「食」の大切さを実感しているところと、母性看護は女性の健康に深く関わるのですが、今後も周産期にある対象へ「食(栄養)」の側面からの看護にも関わっていきたいと考えています。

看護学科は、今年で三年目を迎えますが、この新しい看護学科の一員として異動できましたことを、とてもうれしく思うと同時に責任の重さを感じております。九月から開始し、看護の学びもより一層深化する時期を迎えます。ひとり一人の学生が、母子の健康を守り育む母性看護への関心を高め、意義ある学びが得られるような教育ができるよう努力していきたいと思

教室紹介

皮膚科学

当科は平成十年に中山樹一郎教授が就任され、現在、今福信一准教授、高橋聡講師、他

に助教四名、病院助手四名、大学院生二名、前期研修医数名で構成されています。重症の乾燥患者に対する外来・入院治療や悪性皮膚腫瘍の精査・治療をはじめ、皮膚疾患全般の診療に実績をあげており、福岡都市圏及びその近郊の皮膚科開業医、他

科診療施設からの多数の紹介があります。看護学科は今年で三年目を迎えますが、この新しい看護学科の一員として異動できましたことを、とてもうれしく思うと同時に責任の重さを感じております。九月から開始し、看護の学びもより一層深化する時期を迎えます。ひとり一人の学生が、母子の健康を守り育む母性看護への関心を高め、意義ある学びが得られるような教育ができるよう努力していきたいと思

います。近年、妊婦の栄養状態が胎児および新生児に影響を及ぼし、児の一生の健康に与える報告もあ

ります。私も妊婦や新生児の「食の援助」に関心をもち、助産師が実施している看護のエビデンスを探究しようと、胎盤の物質の通過機構や、出生直後の授乳形態が小腸の吸収機構に及ぼす影響など、動物モデルを用いた「食」に関する組織形態

学的な研究を行い、「食」の大切さを実感しているところと、母性看護は女性の健康に深く関わるのですが、今後も周産期にある対象へ「食(栄養)」の側面からの看護にも関わっていきたいと考えています。

.....

本年四月より、医学部看護学科の「教職担当」として着任いたしました。本学科で看護教諭または高等学校看護科教諭の資格を取得するための科目等を主に担当させていた

だします。私は、公立学校の養護教諭として十五年間、高等学校教諭として五年間の教育現場経験後、中村学園大学短期大学部講師として七年間の勤務を経て、本学に参りました。

近年、妊婦の栄養状態が胎児および新生児に影響を及ぼし、児の一生の健康に与える報告もあ

ります。私も妊婦や新生児の「食の援助」に関心をもち、助産師が実施している看護のエビデンスを探究しようと、胎盤の物質の通過機構や、出生直後の授乳形態が小腸の吸収機構に及ぼす影響など、動物モデルを用いた「食」に関する組織形態

学的な研究を行い、「食」の大切さを実感しているところと、母性看護は女性の健康に深く関わるのですが、今後も周産期にある対象へ「食(栄養)」の側面からの看護にも関わっていきたいと考えています。

.....

本年四月より、医学部看護学科の「教職担当」として着任いたしました。本学科で看護教諭または高等学校看護科教諭の資格を取得するための科目等を主に担当させていた

だします。私は、公立学校の養護教諭として十五年間、高等学校教諭として五年間の教育現場経験後、中村学園大学短期大学部講師として七年間の勤務を経て、本学に参りました。

近年、妊婦の栄養状態が胎児および新生児に影響を及ぼし、児の一生の健康に与える報告もあ

中央病院、静岡がんセンターにレジデントを派遣しています。また皮膚科外来患者の診察、治療(光線療法、レーザー治療を含む)の技術習得と実践的経験を行うため、福岡山王病院、二日市済生会病院、佐世保中央病院、高木病院、廣仁会千歳皮膚科形成外科、石垣皮膚科等へ各若手医師を一二年派遣しています。

研究・学芸 研究活動では厚生労働省の四つの研究班(神経線維腫症、悪性黒色腫、C型肝炎、油症)に所属して、それらが研究の主たる対象になっています。レックリングハウゼン病については神経線維腫細胞を用いた色素斑や神経線維腫の形成の抑制について基礎的な実験を行っています。大学院生の研究では解剖学において悪性黒色腫に対する超音波を用いた遺伝子導入や抗腫瘍導入による腫瘍抑制効果、炎症性皮膚疾患の補体に関する研究などを行っています。またC型肝炎を合併する尋常性乾癬について安全なIFN治療の確立のための基礎的調査も行っております。

当皮膚科では二〇〇八年十月に第六十回日本皮膚科学会西部支部学術大会を福岡市において主催しました。本年(二〇〇九年)は十二月に第二十二回日本色素細胞学会を同じく福岡市で開催します。色素細胞(メラノサイト)の基礎的な研究からメラノーマやシミ、ホクロなどの美容的な面まで含めた幅広いテーマにしたいと企画しています。その他毎年三月に日本皮膚科学会福岡地方会を主催しています。

〈おわりに〉 当科の特徴としては、一般皮膚疾患はもとより乾癬、神経線維腫症などの難治性皮膚疾患、皮膚がんに対する手術治療、集学的治療といった、内科的治療から専門的知識と経験を駆使した皮膚疾患治療を行っており大きな実績をあげています。診療は年々多忙となつていますが、スタッフのチームワークがよく、みな一丸となつて取り組んでいます。今後とも当院皮膚科を宜しく願っています。

医局長 高橋 聡

本年四月より、医学部看護学科の「教職担当」として着任いたしました。本学科で看護教諭または高等学校看護科教諭の資格を取得するための科目等を主に担当させていた

だします。私は、公立学校の養護教諭として十五年間、高等学校教諭として五年間の教育現場経験後、中村学園大学短期大学部講師として七年間の勤務を経て、本学に参りました。

近年、妊婦の栄養状態が胎児および新生児に影響を及ぼし、児の一生の健康に与える報告もあ

ります。私も妊婦や新生児の「食の援助」に関心をもち、助産師が実施している看護のエビデンスを探究しようと、胎盤の物質の通過機構や、出生直後の授乳形態が小腸の吸収機構に及ぼす影響など、動物モデルを用いた「食」に関する組織形態

学的な研究を行い、「食」の大切さを実感しているところと、母性看護は女性の健康に深く関わるのですが、今後も周産期にある対象へ「食(栄養)」の側面からの看護にも関わっていきたいと考えています。

.....

本年四月より、医学部看護学科の「教職担当」として着任いたしました。本学科で看護教諭または高等学校看護科教諭の資格を取得するための科目等を主に担当させていた

だします。私は、公立学校の養護教諭として十五年間、高等学校教諭として五年間の教育現場経験後、中村学園大学短期大学部講師として七年間の勤務を経て、本学に参りました。

近年、妊婦の栄養状態が胎児および新生児に影響を及ぼし、児の一生の健康に与える報告もあ

ります。私も妊婦や新生児の「食の援助」に関心をもち、助産師が実施している看護のエビデンスを探究しようと、胎盤の物質の通過機構や、出生直後の授乳形態が小腸の吸収機構に及ぼす影響など、動物モデルを用いた「食」に関する組織形態

学的な研究を行い、「食」の大切さを実感しているところと、母性看護は女性の健康に深く関わるのですが、今後も周産期にある対象へ「食(栄養)」の側面からの看護にも関わっていきたいと考えています。



看護学科講師 大倉 美鶴



本年、四月一日より看護学科(地域・在宅看護)



看護学科講師 小柳 康子



看護学科講師 佐久間 良子



以上、三月三十一日付け

以上、九月十日付け

以上、九月三十日付け